

不正の虜：イスラエルの拘束システムとハマスの人質戦略が苦しみの連鎖を維持する仕組み

イスラエル人とパレスチナ人の間の長年にわたる紛争は、捕虜の連鎖に悲劇的に反映されています。イスラエルの恣意的な拘束、拷問、そしてパレスチナ人への非人間化と、それに対するハマスの人質奪取という行為です。両方の行為は計り知れない苦しみを引き起こしています。パレスチナ人は、適正な法的手続きのないシステムに消えるという絶え間ない脅威にさらされ、イスラエル人は武装グループに拘束された愛する人々を悼みます。その結果、トラウマ、怒り、そして過激化の永続的なフィードバックループが生まれています。

この連鎖は、最近では2023年10月に交渉された取引を通じて、双方の捕虜を解放する可能性があったことで中断できたかもしれませんが、しかし、ベンヤミン・ネタニヤフ首相率いるイスラエル政府は、極端な勢力に押され、外交よりもエスカレーションを選び、主要な交渉者を脇に追いやり、苦しみを長引かせました。イスラエルの違法な拘束体制を終わらせず、外交的チャネルを拒否したことは、苦しみのスパイラルをさらに定着させました。

イスラエルの拘束体制：制度化された不正

1967年以来、イスラエルは占領されたパレスチナ領土で行政拘禁と軍事裁判を支配の道具として用いてきました。これらの仕組みは、国際的な法的規範の範囲外で完全に運営されています。パレスチナ人は、秘密の証拠に基づいて、起訴や裁判なしで無期限に投獄される可能性があります。効果的な上訴手段はありません。99.7%近い有罪率を持つ軍事裁判は、正義ではなく強制の道具として機能します。これらの慣行は、**世界人権宣言（第9条および第10条）、市民的及び政治的権利に関する国際規約（第9条および第14条）、そして第四ジュネーブ条約（第64-66条）**に直接違反しています。

拷問と虐待は体系的です。国連機関や人権団体による多くの報告書は、殴打、ストレスポジション、ウォーターボーディング、電気ショック、性的屈辱、そして物体によるレイプの使用を記録しています。2015年の報告書では、2005年から2012年の間に少なくとも60件の性的拷問が記録されました。これらの行為は、**拷問禁止条約（第1条および第16条）** および **ICCPR第7条** に違反し、いかなる状況下でも拷問を禁止しています。

2023年10月7日以降、これらの虐待は劇的に増加しました。2024年8月までに、少なくとも53人のパレスチナ人拘束者が拘留中に死亡し、多くの者が拷問の痕跡を示していました。14歳の子供たちでさえ、強制的な裸や屈辱的な扱いを受けています。実際、このような条件下で拘束されたパレスチナ人は、自由だけでなく人間性も奪われています。体系的な性質と、民間人に対する圧力をかける意図を考慮すると、これらの行為は、**1979年人質奪取禁止国際条約**の定義に該当する可能性があり、これは個人を傷害や死亡の脅威の下で拘束し、第三者（この場合はパレスチナ社会）に行動を強制することを含みます。

パレスチナ社会の心理的荒廃

恣意的な拘束によるトラウマは、刑務所の壁をはるかに超えて響き渡ります。家族は、特に子供たちが夜間に連れ去られ、連絡が取れなくなり、拷問されるのではないかと絶え間ない恐怖の中で生活しています。多くのパレスチナ人にとって、「逮捕」という言葉は適正な法的手続きを意味せず、失踪、暴力、そして場合によっては死を意味します。2024年までに、9,500人以上のパレスチナ人が拘束され、集団的な恐怖と悲しみを助長しています。

この広範な苦しみは、受動性を生み出すのではなく、抵抗を生み出します。答えを求めて必死になった家族やコミュニティは、しばしば影響力を約束する唯一の存在、すなわち武装グループに頼ります。これは暴力の正当化ではありませんが、心理的な現実の認識です。あなたの子が不法に投獄され、拷問され、生きて再会する可能性が低いとき、彼らの帰還を確保するために「何でもする」という本能は深く人間的です。この心理的必須性は、国際法の下での弁護ではありませんが、ハマスの戦略を理解する鍵です。

ハマスの人質奪取：不法だが理解可能なもの

2023年10月7日、ハマスは251人のイスラエル人人質を捕らえ、世界を震撼させました。この行動は、**1979年人質条約**の下で明確に禁止されている、市民を捕らえて政府の行動を強制する行為として、違法かつ道徳的に弁護の余地がありません。しかし、ハマスがこの戦術を真空状態で作り出したわけではありません。それは歴史的な前例と心理的論理を持っています。

2011年のギラド・シャリート捕虜交換では、1人のイスラエル兵と引き換えに1,000人以上のパレスチナ人が解放され、パレスチナ人の間で、人質奪取だけが結果をもたらすという見方が強化されました。イスラエルの法制度が拘束者に正義への道を提供しない中、ハマスは人質を交渉の切り札として利用します。これは倫理的に忌まわしく、しかし政治的には効果的な戦略です。繰り返しになりますが、目的は行為を擁護することではなく、その根源に直面することです。外交や合法性が価値を持たないと信じ込まされた、残虐化された社会です。

したがって、道徳的および法的な等価性は、方法（人質奪取と拘束）にあるのではなく、それらの根本的な違法性と非人間化効果にあります。イスラエルの恣意的な拘束とハマスの人質奪取は、どちらも国際法に違反し、市民を標的にしています。一方は国家によって承認され、日常化され、法的官僚主義に覆われています。もう一方は壮観で即時的です。しかし、どちらも強制、トラウマ、そして絶望の同じ連鎖の一部です。

共有された苦しみ

イスラエル側の悲しみは深いものです。人質の家族は、愛する人が活着しているかどうかを知ることができず、いつ、どのように帰還するかもわからない、苦痛に満ちた不確実さに耐えています。彼らの痛みは、「行政拘禁」という異なる名前で、同じ不在、恐怖、無力感を経験するパレスチナ人の家族の痛みを反映しています。

この並行した苦しみは、共感の余地を生み出すべきでした。代わりに、それは武器化されました。イスラエルで停戦と人質取引を求める抗議者は無視されたり、軽視されたりしています。ハイム・ルビンシュタインのような人物を含むイスラエル人人質の家族は、ネタニヤフ政府が政治的利益のために愛する人を犠牲にしていると公に非難しています。

見逃された機会と政策の失敗

この深淵からの脱出の道は存在しました。2023年10月、ガーション・バスキンが主導し、カタルとハマスの連絡先による仲介を受けた裏ルートの交渉は、相互解放のための実行可能な枠組みを提供しました。しかし、ネタニヤフの強硬派政府は、イタマル・ベン・グヴィルやベザレル・スモトリッチのような超国家主義者に支配され、これらの提案を拒否しました。当時、人質交渉の主要な役人であったオレン・セッターは、見逃された機会に抗議して辞任しました。

これは戦術的なミスではなく、道徳的な失敗でした。人道的解決よりも軍事的なエスカレーションを優先することは、イスラエル人やパレスチナ人を解放しませんでした。それは痛みを深め、さらに過激化を推進し、捕虜を戦争の道具として使用することを定着させました。

連鎖を断ち切る

この連鎖を終わらせることは、空爆や人質救出から始まるのではなく、それらを必要とした構造を解体することから始まります。イスラエルは、恣意的な拘束と軍事裁判のシステムを廃止する必要があります。これらは法の支配を破壊し、暴力的な報復を生み出す慣行です。この核心的な不正に対処しない限り、一時的な停戦や交換は、次の拉致と流血の連鎖を遅らせるだけです。

正義は選択的であってはなりません。ハマスの人質奪取を非難する同じ原則は、イスラエルの無期限かつ法外な市民の投獄も拒否しなければなりません。両方の捕虜形態が廃止されるまで、両国民は相互の苦しみで繁栄するシステムの囚人であり続けるでしょう。